2025.10月第683号

アシュラム ASHRAM

発行所　アシュラムセンター
523-0894 近江八幡市中村町 567-2
Tel 0748-33-4030
Fax 0748-33-8856
アシュラムセンターホームページ
www.ashramcenter.jp
編　集　アシュラム誌編集委員会
振　替　01050-6-53772
アシュラムセンター
印　刷　明文舎印刷商事（株）

解　題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。祈りの生活をもってみ前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

ダビデ王の時代、神殿の務めとして「門衛」という役割が定められた。しかし実際に神殿が建てられるのはソロモンの代であり、それは「まだ見ぬ神殿」のための備えであった。

歴代誌上26章によれば、彼らは「くじによって」その持ち場を与えられたとある。北の門、南の門、倉の門――それぞれ自らが選んだのではなく、くじによって定められたのである。同じように、モーセもまた「まだ見ぬ約束の地」を前にして、イスラエルの十二部族に「くじ」によって嗣業の地を分け与えた。そしてまた初代教会においても、ペンテコステを前に、イエスを裏切ったユダの代わりにマティアが「くじ」によって定められたのだ。そこには、人の思惑を超えて働かれる神の御心が示されている。

「くじ」とは何か。それは人の思惑を退け、ただ神の意思に委ねる営みである。「くじは人のふところに投げられるが、定めるのは主である」（箴言16章33節）。まさにこの言葉通りである。モーセも、ダビデも、使徒たちも、皆「まだ見ぬ未来」を信じ、全てを主に委ねて、くじを引いたのである。

瞑想

彼らは年少者も年長者も家系ごとにくじを引いて、それぞれの門を決めた。

（歴代誌上26章13節）

主幹牧師　榎本　恵

今年、私たちアシュラムセンターは50周年を迎えた。この近江八幡の地もまた、まさに「くじを引くようにして」与えられた地である。しかし実はそれ以前に、この地はすでに一人のアメリカ人によって「くじ引かれて」いたのである。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ――彼が近江八幡に降り立ったのは1905年2月であった。今年は彼の来幡120年の記念の年でもある。

「向こう岸へ渡ろう」との神の声を聞き、くじを引いた榎本保郎牧師。学生時代、「中国伝道の苦しみにあずかる」というハワード・テーラー夫人の言葉に導かれ、くじを引いたヴォーリズ師。彼らの50年後、120年後の未来を誰が予想できたであろうか。しかし、そのくじを定めるのは、ただ主お一人である。

さて、黙示録には「新しいエルサレムにある十二の門」が描かれている。神々しい都、しかしその内には守るべき神殿はない。なぜなら「全能者である神、主と子羊とが都の神殿そのものだからである」（黙示録21章22節）からだ。「その門は一日中決して閉じられることがない」（同21章25節）。新しいエルサレムには夜がなく、門を閉ざす必要がない。すべてが光の中にあり、神の臨在に包まれているのである。

友よ、今こそ私たちが「くじを引く」時である。ダビデの「守られる門」から、黙示録の「開かれた門」へ。自ら選んだ場ではなく、くじによって与えられた務めを果たした者が、やがて「閉じられることのない門」に迎え入れられる。そこにこそ、私たちのくじを引く意味があるのだから。

アシュラムセンター 創立50周年記念企画

今治教会辞任と今後

（アシュラム誌1975年7月号より）　榎本 保郎

去る7月20日の礼拝後の臨時総会に於いて、私が提出していました今治教会辞任願いが承認可決されました。

祈って下さった方々の主にある御愛に対し、心からなる感謝を申し上げます。

今後はアシュラム運動のために専念するわけですが、現在大体二つのことを考えております。

一つはアシュラム運動の推進であります。現在台湾も含めて、約15ヶ所で定期的なアシュラムが持たれております。ここで特に注意したいことは、只ムーブメントとして多くの人を集めたり、その回数が増えたりすることを目標としてはならないことであります。

私たちのアシュラムは「み言葉に聞くことと祈りをすること」をその特徴としております。このような信仰生活が、教会生活の確立こそ肝要であることを痛感して、この運動をおこしておるのであり、その意味では、この運動は教会に仕える運動であり、教会を更新して行くことを願う集いであります。こうした目的が達成されて、主の栄光が拝されることこそ、私たちの願いであります。そのために私は仕えて行きたいと願っております。

もう一つは修道の場を設置したいと思っています。例えば1ヶ月とか半月とか生活を共にし、祈りの時、午後は勤労の時、夜は再び静聴の時を持つというような、いわゆる長期のアシュラムを持ちたいと計画しています。

一人でも二人でも希望者があれば、否、最初は誰もいなくても私一人でも、このような修道の時を持ちたいと思っております。最後に、どこに住むかということですが、実はまだ決定しておりません。以上のような、今後の活動に最も適した場を与えられるよう祈っております。

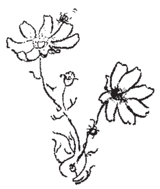
「そこでモーセは妻と子供たちをとり、ロバに乗せて、エジプトの地に帰った。モーセは手に神のつえを執った」出エジプト記4-3

12年余私なりに身血を注いで牧会伝道に当たった教会をはなれ、親身以上に親しく愛してくれた教会員のもとを出て、新しい地に出ていかんとするに当たり、主の召命とは、信ずるものの不安の去来するきょうこの頃です。そのような私にとって、このモーセの姿は大きななぐさめであり励ましであります。

「先生には神様がついておられるから大丈夫ですよね」と会う人ごとに云ってくださいます。確かに今日までのことを思うとそうにちがいない。それだのに一抹の不安が私の心を走る時がある。不安顔の妻の顔を見るたびに、信頼してよりそってくる子供達のひとみを見るたびに、私の心は一瞬たじろぎ、視線のやり場に当惑する。そして、私にも与えられている神のつえをそのたびごとに握りしめる。「どうしてそんなにこわがるのか。信仰薄き者よ。」イエス様の声が聞こえて来る。所詮イエス様には頭があがらない。「不信仰な私を助けてください」と祈る外ない。

これが今のわたしのありのままの姿です。しかし、きっと、この不安は、風も海も静め給う主の御栄光を拝する恵みに通じる道であると信じて、平安を得ております。一層の御加禱願いいたします。

（続く）



今治幼稚園の先生方と。中央保郎師左の子、恵師の肩を抱いている青年は、なんと、はしだのりひこ兄！（世光教会、シンガーソングライター・シューベルツ♪）

第1回こどもアシュラムに参加して

田口　和子

2日間、ほんとうにお世話になりました。孫たちもとても楽しそうでした。

初めて広い場所で、他の子ども達と一緒に寝たり、ヨーヨー釣りやスイカ割など心ゆくまでさせてもらって、大満足の様子でした。

アシュラム誌と共に、こどもアシュラムのお知らせが送られて来た時「あっ、これ良いな！」と思いました。娘も案内のチラシを見て、「これ良いなあ、行きたいなぁ」と思ったそうです。そんな時、アシュラムセンターから誕生日のハガキが届き、るつ子姉から参加のお誘いがあり後押しされました。わたしは、（お祈りは、次の行動を生む）というシュバイツアー少年のお祈りの話に共感しました。

孫たちの感想は、今は「ヨーヨー釣りが楽しかった」「スイカ割が楽しかった」という事。でも子ども達が聞いたみことば（お話）や歌った讃美歌が、きっと心の中に入っていて、いつ芽を出すかはわからないですが、いつか、イエス様は優しい羊飼いで、自分はその羊だと言うことが自分の事として分かると良いと願っています。そのために、私に出来るのは、こうした機会に孫たちを連れて来る事と、信仰が与えられますようにと、孫たちのためにお祈りする事だと思いました。

良い経験が出来ました事を心から感謝しています。るつ子姉やお世話になった皆さまありがとうございました。

（日本福音ルーテル大垣教会　岐阜アシュラム）（年頭アシュラム）

第一回こどもアシュラムを終えて

橋本　るつ子

今年初めから祈り備えてきました第一回子供アシュラムが、8月8日～9日、神さまの恵をいっぱい受けて終えることができました。北は岐阜から、南は沖縄からの2歳から小学校5年生までのかわいい子供たち11名が参加してくれました。

「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」を主題聖句とし、迷い出た一匹の羊とそれをどこまでも探し続けてくれた羊飼い、そして迷わず残った99匹の羊たち…この話を真剣なまなざしで聞いてくれた子供たち、そして、遊ぶ時、へーこんな遊び方もあるのか、と感心させられる想像力豊かな子供たち、好き嫌いなく優しいおばさんたちが作ってくれた食事を完食してくれた子供たち、みーんなとっても素敵な光の子供達でした。

聖書もお話の時、最後に「みんなは迷い出て帰る道の分からなくなった羊さん？それとも迷わず残った羊さん？」と聞きますと、なんと全員「迷わなかった羊！」と答えてくれました。想像はしていましたがなんだか笑えてきました。そして心の中で『もし大きくなって迷うことがあったら思い出してね。必ず見つけ出してくださる羊飼いがいること、そして見つけたら、その羊飼いも大喜び、迷った羊も大喜び、連れて帰ってきた時、待っていた迷わなかった羊も大喜び、みんな大喜びする世界があることを。』

「とうとうやさしい

羊飼いは、迷子の羊を見つけました。抱かれて帰るこの羊は、よろこばしさにおどりました。」

私自身が、神さまに見つけ出された喜び、躍り上がるほどの喜びを思い出させてもらった恵みの時でした。

今年初めより共に祈り、いろいろご支援いただきました皆様に心から感謝いたします。

また、来年の夏楽しみにしています。

（下関 安岡教会）（パイプオルガニスト、るんるん福音食堂主、♪チャイム・ベル等指導者、等々）

I Love Taiwan Mission（ILT）に参加して 6

約十日間にわたる復興教会でのサマーキャンプと交わりの時が幕を閉じ、私たちは閉会式のために再び集まりました。そこで各派遣先での活動の報告が行われ、その後は国ごとの紹介が続きました。

台湾はホスト国らしいダンス、韓国は最新のK-Popと賛美、ニュージーランドは力強いハカ、インドは伝統の舞、アメリカは華やかなハリウッドの紹介など――それぞれの文化が会場に色鮮やかに広がってゆきました。日本からはソーラン節やけん玉、若者に人気のダンス、そして私は沖縄のエイサーを披露しました。日本人らしく事前準備をしっかりした甲斐もあって無事成功し、大仕事を終えたような安堵が胸に広がりました。

やがて全体での閉会礼拝が始まりました。奉仕者で、長年台湾で宣教を続けてこられたJohn McCall牧師は「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」（Ｉヨハネ４：19）との御言葉を語られました。その瞬間、このプログラムを通して自分が受け取ってきたすべての思いが一つに結び合わされたように感じました。私は台湾を愛しているから、愛するために来たと思っていましたが、実際には、台湾の人々が私を温かく迎え入れ、愛してくれていたのです。そしてその愛は、神様が彼らを愛されたからこそ注がれたものであり、同じように私自身も神に深く愛されているから、他者を愛することができるのだと気づかされました。

McCall牧師はさらに「God so loved the world」（ヨハネ３：16）をそれぞれの母語で語るように促されました。私はなぜか最前列に座っていたため、案の定真っ先に当てられ「神はこの世をとても愛された」と答えました。すると牧師は “Beautiful” と返してくださり、その響きは心の奥にまで染み渡りました。その後も韓国語、インドのミゾ語、台湾語と続き、そのたびに同じく “Beautiful” という言葉が返されました。言葉の違いを超えて神様を賛美する声が一つに響き合うことの美しさに、全身が震えました。

人種も言語も文化も異なる私たち。しかし誰一人漏れることなく、神に等しく愛されている。その確信のゆえにこそ、私たちは互いに愛し合うことができる――今回のプログラムを通して、それを深く実感しました。この機会を備え、あらゆる面で支えてくださった方々に、そして何よりも主に、心からの感謝を捧げます。

榎本 光太

台中復興教会の皆様に感謝

閉会の祈祷

シメオンの風5　「アベルモン宣教師の蓮の花」　市橋 恵子

シメオン黙想の家には小さなビオトープがあります。それは長方形のたたみ一畳ほどの池ですが、アシュラムの兄弟たちがこれまでも金魚を飼育してくださったり、ホテイアオイを育ててくださったりして、ここに住む小さな生き物たちを守っておられます。池の横にはベンチがおかれ、もみじの木が日陰を作って訪れる人たちに休息の場所を与えてくれています。

個人的な話で恐縮ですが、白蓮が好きです。毎年京都府立植物園の早朝開園（朝７時）の期間には、お目当ての白蓮と、そして紅連を見に行きます。これまで蓮といえば白か紅だけだと思っていました。

近頃は紫色の花も！

ところがこの夏、シメオンの池には可憐な白い花弁に黄色いガクの蓮の花が咲きました。蓮の花を育ててくださったのはアベル門宣教師です。蓮の花も様々にあるのですね。インターネットで調べてみれば、私たちがよく目にする白蓮や紅連のような色の蓮は東洋系の品種で、そのほかにもバージニア蓮とよばれる黄色い蓮の品種などいろいろあるようです。この蓮の花は私たちが目にする他のそれよりも小さくて、この小さなビオトープの中で見事に調和しています。猛暑といわれた今年の夏に池に咲くこの蓮は、私たちの目を楽しませてくれ、和ませてくれました。

アベル門宣教師がアシュラムセンターに来られてから、シメオンの庭の草を刈ったり、花を咲かせたり、さりげなくされる働きにあらためて気が付いて感謝です。来年も蓮の花が咲くのを楽しみにしています。

いえじま 雑記28　「タネ」

長い旅から帰ってきた私たち、また伊江島での日常が始まりました。真夏を通り抜けた伊江島はまだまだ暑いですが、海の色は少し薄くなったように見えます。波も穏やかで、風も心なしか冷たくなったように感じます。

長女はプールの授業が楽しいようで、少しだけ泳げるようになったと鼻高々に下校してきます。次女はいつのまにか自転車を乗り回しています。いちばんおしゃべりな三女は、なんだかよくわからないですが、みるみる成長してくのでしょう。

子どもアシュラムでやったスイカ割りがよほど楽しかったのか、この前スイカを買ってくると、スイカ割りがはじまりました。ご丁寧に目隠しまでして、どこかから程よい棒を探してきて、誰が最初に叩くか喧嘩をして、泣き声がして。大騒動のすえに、きれいに平らげられたスイカの残骸を見ながら、ふと思いました。もしかしてタネを植えたら、出てくるんじゃないだろうか。さっそく、プランターにタネを植えました。一日たち、二日たち、三日たち、なんの音沙汰もなく、タネを植えたことすら忘れかけていた頃、なんと芽が出ているではありませんか！最近は、スイカの芽への水やりが朝の日課になりました。季節外れのスイカのタネを見守りたいと思います。

榎本 空（ノースカロライナ大学院生、沖縄伊江島在住）

8月、常任運営委員のための修道場アシュラム。記念会、年頭アシュラム等、祈り合わせて…

常任のアシュラム、夕食に和田モッド姉のタイ料理、辛さ控えめ！大好評!!

加古川祈りの家。フリーメソジスト加古川教会にて。小林清子姉愛唱歌を共に。

あとがき

神の「気配」を感じ取ること――それが大切なのです。

私たちは往々にして、人に気を配り、世間に気を配り、あちらこちらに気を散らします。しかし、本当に気を配るべきは、人ではなく神ご自身なのです。

ところが、その「気」が「心」に変わるとき、心配りはいつの間にか心配に変わってしまいます。自分の恐れや不安に心を配ると、それはただの心配にすり替わってしまうのです。

もし私たちが、気を神に向けて配るならばどうでしょう。そこに神の気配が満ちていることに気づかされるのです。朝の光にも、道端の草花にも、人との出会いの一言にも、神の気配が隠されています。

だから「気を配る」とは、実は「神の気配を探し求めること」なのです。（恵）

2016. PM 10:00
わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。ヨハネ15:7
榎本和子

中止、又はオンラインに変更もあり。
ホームページ、電話等でご確認下さい。直前の変更の場合あり！

【主な問い合わせ先】0748－33－4030 アシュラムセンター
【Zoom・インターネット等 問い合わせ先】080－3983－8140

10月の聖書教室など

3㈮	阪神ミニアシュラム（神戸聖愛教会 PM1:00）
5㈰	ちいろば牧師記念チャペル夕礼拝（PM5:00）
10㈮	センター聖書教室（アシュラムセンター AM11:00）
15㈬	みんなのカフェちいろば聖書入門講座（京都・伏見区深草 PM1:30）
21㈫	大阪聖書教室（大阪クリスチャンセンター AM10:30）
27㈪	静岡聖書教室（旧・英和女学院宣教師館 AM10:00、PM1:30）
28㈫	東京聖書教室（御茶ノ水クリスチャンセンター４F AM10:30）
28㈫	しみじみする会（桜美林大学 荊冠堂チャペル PM2:30）
11/7㈮	阪神ミニアシュラム（神戸聖愛教会 PM1:00）

10月のアシュラムなど

9㈭〜10㈮	修道場アシュラム（現在６名申込） 奉仕者　榎本　恵師	0748－33－4030 アシュラムセンター
13㈪	第49回 山陰アシュラム 奉仕者　山陰アシュラムメンバー	080－5493－9242 遠藤誠一師
21㈫	第29回 埼玉一日アシュラム 奉仕者　秋山　信夫師	090－2919－3811 秋山信夫師
25㈯	第６回 水戸（教会）アシュラム 奉仕者　榎本　恵師	029－248－6751 水戸バプテスト教会

11月のアシュラム予定

3㈪〜5㈬	第50回 京浜アシュラム 奉仕者　榎本　恵師	090－2312－5855 江口公一師
22㈯	天上の友を憶える日礼拝 奉仕者　榎本　恵師	0748－33－4030 アシュラムセンター
24㈪〜26㈬	第20回 国際正義平和アシュラム （創立50周年記念） 奉仕者　榎本　恵師	0748－33－4030 アシュラムセンター
24㈪	50周年記念講演会 （ヴォーリズ学園教育会館） 奉仕者　最相　葉月氏 AM11:00～12:30	0748－33－4030 アシュラムセンター
25㈫	50周年記念礼拝（ピアザ淡海） 奉仕者　中道　基夫師 AM11:00～12:00	0748－33－4030 アシュラムセンター 077－527－6333 ホテルピアザ淡海
25㈫	50周年記念「すべての地に安息を」 コンサート（ピアザ淡海） 開場 PM5:30　開演 PM6:00 奉仕者　アン・マシューズ女史、台湾原住民族聖歌隊、長峰更紗（バレエ）、弦楽三重奏（中山ゆき子と仲間達）、ゴスペルシンガー横山大輔・和子、チャイムコンソート	0748－33－4030 アシュラムセンター

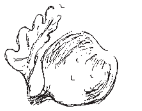
献金のお願い（特に創立50周年のために！）

皆様のお祈り、お支えに感謝いたします。
引き続きお祈りとご献金をお願い申し上げます。

キャッシュレス献金はこちらのQRコード
または「オンライン献金.com」と検索ください。
アシュラムセンター運営
記号番号　01050-6-53772

みことば

日本キリスト教団 豊島岡教会
南花島集会所　牧師 江口公一



切られず実ったいちじく
Wハウス

７章「ですから、あなたがたに手紙を送ったのは、不義を行った者のためでも、その被害者のためでもなく、わたしたちに対するあなたがたの熱心を、神の御前であなたがたに明らかにするためでした。」（Ⅱコリント７：12）

「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」（Ⅰコリント１：13）とパウロが問いかけた混乱と争いの状況がコリントの教会には続いていたのでしょう。冒頭の７：12に「あなたがたに（私が）手紙を送った」とあるその手紙は、内容的には和解の手紙だったのだろうと思います。その中心メッセージは「キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。」（５：20）だったのではないかと思います。

港湾貿易都市コリントの教会には往来する人も多く、巡回伝道者も来たようです。内部に対立も生じ、十字架につけられたキリストの福音を伝えコリント教会を創設したパウロと信徒との信頼関係が損なわれて行く状況にあったのでしょう。パウロと信徒との間に、キリストを生きる「熱心」な信頼関係の回復が何よりも必要だったのです。推薦状を携えて来る人もいたようですが、パウロの推薦状はパウロ達が「キリストの全権大使」だと神によって信じる「あなたがた自身」（３：２）でなければならなかったのです。

パウロ自身が深い「悲しみ」にあり、「悔い改め」つつこの手紙を書いたと思います。「神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ」（７：10）とは、まずパウロに起こった事だと思います。罪の「悲しみ」の中で「悔い改め」、神への回心が改めて生じ、そこから引き起こされたキリストを生きる「熱心」によってこの手紙を書いたのではないでしょうか。そこには神から委ねられた「和解の言葉」が散りばめられていたと思います。それがパウロ達に対する「熱心」をコリントの信徒に起こさせたのです。

今を生きる私達も、このような和解の手紙を書けるでしょうか。御心に適った「悲しみ」、「悔い改め」、キリストを生きる「熱心」が私達に起こされますように。神と隣人との「和解」に向けた救いの道を私達が歩み始める事ができますように。

聴従
感謝をこめて
三浦綾子

三浦綾子著「ちいろば先生物語」の始めに、書かれたもの。恵様、1987年と。